

研究成果要旨

研究テーマ
認知症高齢者の看護にともなう困難感尺度の作成
研究組織
研究（代表）者：日本赤十字北海道看護大学・教授・西片久美子 共同研究者：日本赤十字豊田看護大学・教授・小林尚司 日本赤十字看護大学・准教授・田中孝美
キーワード
急性期病院、認知症高齢者、困難感尺度

研究報告

（１）研究の背景・目的

日本老年看護学会(2016)は、急性期病院における認知症高齢者の看護の質向上が喫緊の課題（日本老年看護学会，2016）と指摘している。認知症高齢者看護の質の向上を図るうえで、困難の内容と程度を客観的に把握することが必要である。

そこで本研究では急性期病院における認知症高齢者の看護にともなう困難感尺度を作成することを目的とした。

（２）研究方法

文献検討および急性期病院で認知症高齢者の看護経験のある看護師に対するインタビューを実施し、その結果から 45 項目の尺度原案を作成した。次に、急性期病院に勤務する看護師 300 名を対象に予備調査を行い、182 名（60.7%）から回答を得た。項目分析、I-T 相関、 α 係数による検討で不適切な項目を除外し、因子分析を行い、3 因子 20 項目を抽出した。回答選択肢は 5 段階のリッカートスケールを用いた。さらに、尺度の信頼性と妥当性を検討するため、500 名の看護師を対象に本調査を実施した。信頼性の検討はクロンバック α と再テスト法、内容妥当性及び基準関連妥当性を検討した。実施にあたっては、日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会の承認を得て行った。

（３）研究結果

記載が不十分な 10 名を除く 226 名（45.2%）を分析対象とした。主因子法による因子分析を行い、4 因子 20 項目の尺度を作成した。第 1 因子「行動・心理症状への対応」（8 項目）、第 2 因子「ケアにかかわる判断」（5 項目）、第 3 因子「関係形成」（4 項目）、第 4 因子「チームでの対応」（3 項目）と命名した。尺度全体の信頼性は、クロンバック α = .901、48 名による再テスト法は r = .863 であり、基準関連妥当性は r = .626 であった。

（４）考察

尺度の信頼性においては、内的整合性・安定性ともに高いことが確認された。基準関連妥当性については、本研究の第 1 因子である「行動・心理症状への対応」と千田（2010）尺度の第 1 因子「看護介入の拒否への対応」・第 4 因子「行動障害への対応」、および本研究の第 4 因子である「チームでの対応」と千田尺度の第 2 因子「限られた時間、人員での対応」が類似しており、概念構造上半分以上の重なりが認められた。よって $r=.626$ は妥当な結果であると考ええる。従って、本研究で作成した尺度は急性期病院における認知症患者の看護における困難感の測定に活用できると判断できる。

（5）結論

急性期病院における認知症高齢者の看護にともなう困難感尺度は、「行動・心理症状への対応」「ケアにかかわる判断」「関係形成」「チームでの対応」の 4 因子 20 項目で構成された。信頼性・妥当性ともに確認がされ急性期病院での使用が可能であると判断できる。

（6）謝辞

本研究は平成 29 年度「学校法人日本赤十字学園赤十字と看護・介護に関する研究助成」により助成を受けた。

（7）引用文献

日本老年看護学会(2016).「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」日本老年看護学会の立場表明 2016. 日本老年看護学会 HP.